

アズの整枝剪定

令和7年12月
長野農業農村支援センター

1 整枝・剪定前のチェックポイント

項目	チェックポイント
樹冠	樹の高さ、枝の混み具合、枝枯れ、枝のはげ上がり等
枝幹基部	日焼けの発生状況、胴枯病の有無、切口からの枯れ込み等
樹勢	枝の伸び具合（主枝、垂主枝、側枝、結果枝）
細菌性病害	枝病斑の有無

2 整枝・剪定方法

●生産が上がる樹づくりと作業性の向上

(1) 樹づくり

○目標樹形（主枝2～3本の開心自然形）

（基本）第1主枝は地上40～50cmとやや低目から出し、第2・3主枝は20～30cmの間隔を空ける。各主枝に垂主枝を2～3本配置し、樹高は4m程度に維持。

○強剪定に注意し柔軟な対応を！

アズは樹の性質上、理想通りの樹形にならない場合が多い。樹形にこだわり過ぎると強剪定になりやすいので、柔軟な対応も必要。

○低樹高化への誘導

着果位置の高さは3m程度に抑える。

土壌管理・支柱立ての面から、着果位置が低すぎても作業性が悪くなる。

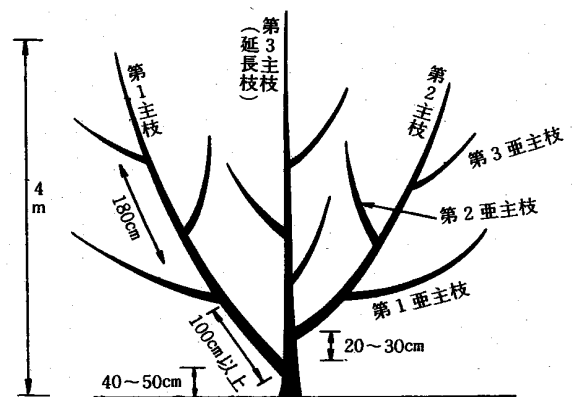
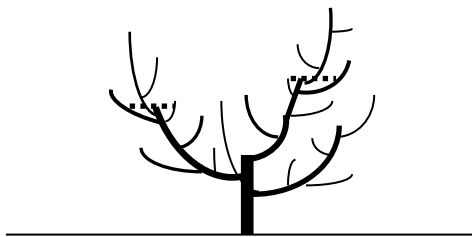


図1 目標樹形（果樹指導指針）



事例1)

高くなった主枝先端部を横から発生した垂主枝又は大きめの側枝に更新する。



事例2)

樹冠上部：着果の中心

樹冠下部：枯れ上がりの枝が多い

（改善方法は2通りある）

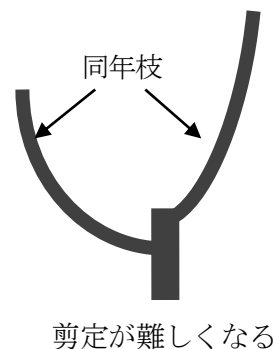
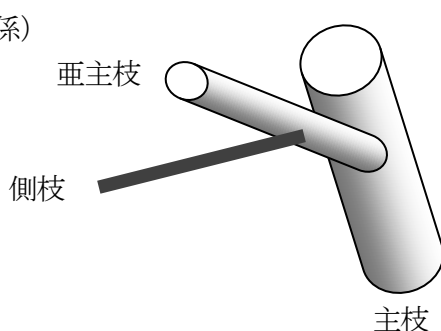
- ① 骨格となる枝を決めて、樹冠上部で誘引できそうな側枝を誘引する（先端は30度程度に保つ）。全部の枝を誘引しない。樹冠内部の枝、重なり枝等を切除する。
- ② 内向枝や樹冠内部の混み合っている（立ち気味の枝）を切除し、数年かけて樹高を下げる。同時に下枝の枝のはげ上がった生産力の落ちた枝を若い枝に更新させていく。

○樹を長く持たせる

・枝の残し方（太さの関係）

主枝：亜主枝：側枝

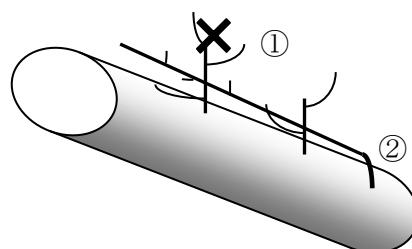
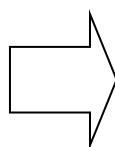
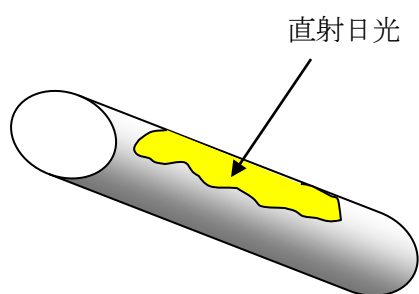
7 : 3
7 : 3



・日焼け対策

主幹基部で対策が必要

発生してからでは遅い！



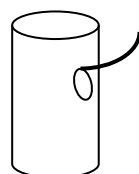
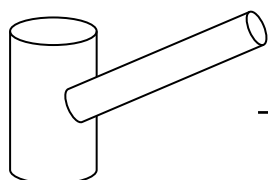
遮るものがないと樹にダメージを与える

背面から発生する枝を利用（小さく維持）

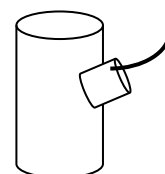
①立枝を切り戻して利用

②長い枝は誘引して利用

・太枝を切る場合の留意点



基部に小枝を残して切る



小枝がある所で切る

・胴枯病の感染防止・事後対策

凍害から主幹部を保護する（白塗剤の塗布、わらでの被覆）。病斑を確認したら削り取り塗布剤を塗る。

傷口からの感染防止（塗布剤の塗布）

（2）徒長枝の処理方法

○結実不良樹：徒長した太い枝が多い→使える枝は側枝として利用。

・夏季管理（主幹基部～中央部）とセットで考える→使える枝が多くなる。切口が小さくなる。

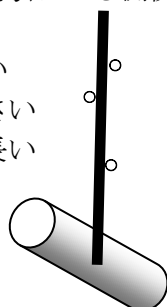
・剪定時の誘引による側枝化

使えない枝

直径が太い

花芽が小さい

節間長が長い

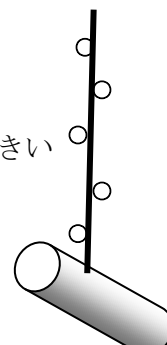


使える枝

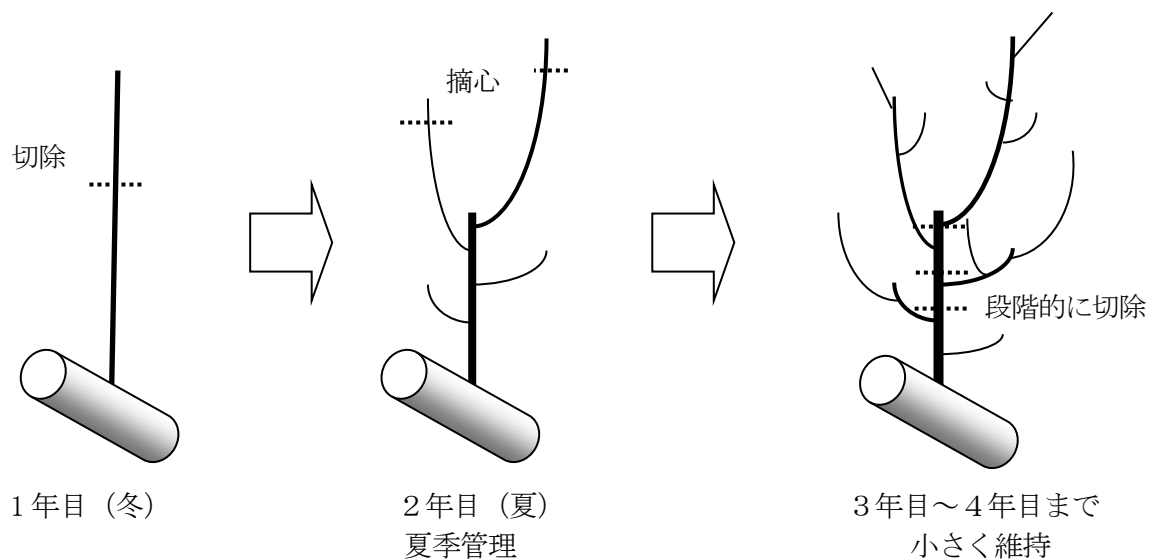
直径1 cm以下

花芽が基部着生し大きい

節間長が短い

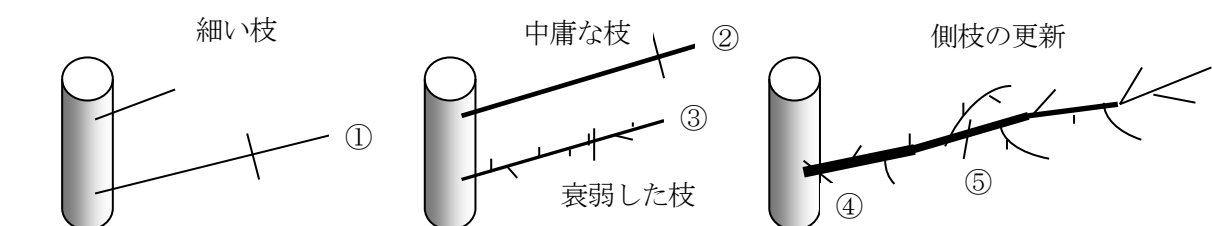


- ・背面から発生する徒長枝を途中から切る場合（暫定的）…周辺に枝がない場合



（3）側枝の積極的な育成方法

- ①細い枝：必要に応じて残して育成していく。長い枝は切り返す。
- ②中庸な枝：節間が短く、花芽が基部から着生し充実している。長い場合は先刈りを加える。
- ③衰弱した枝：途中で切り返す。
- ④⑤側枝の更新：側枝は3～4年使用すると基部に芽がなくなり、全体の生育も悪くなる。若返りを図るため、基部まで切り戻すか、途中の枝で切り返して枝の更新を図る。



注）切り返す場合は葉芽を確認して行う

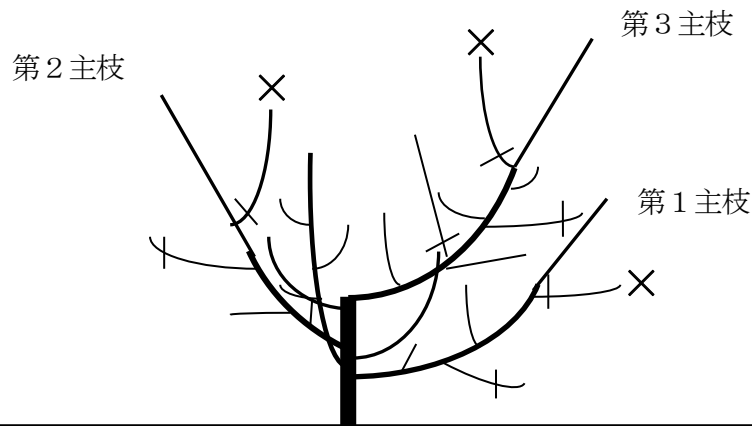
（4）骨格枝の管理

結実が多くなると、骨格枝の先端が果実の重み等で下垂し、生育が悪くなる。骨格枝の先端は垂れないように、切り戻しや切り返しを行い、やや強めに維持する。剪定だけでは、樹勢維持が難しい場合は、支柱等を利用する。

樹勢が衰弱し新梢の発生が悪い場合は、骨格枝を切り返し、不定芽から発生した徒長枝などで枝の若返りを図る。

（5）若木の整枝剪定のポイント

- 冬の剪定だけでは樹形的确立が難しいため、夏季管理も実施する。
- 樹形を確立させながら着果させるため、主枝と側枝は明確に区分して扱う。
- 強剪定にならないように注意し、主枝以外の細い枝はなるべく残す（日焼け対策も兼ねる）。
- 主枝延長枝と同年枝（×印）を残さないようにする（残してしまうと抜くタイミングが難しい）。



3 品種毎のせん定 留意点

(1) 「山形三号」「平和」・・・いちばんせん定が難しい

①枝の発生は少なく、しかも不規則に発生しやすい。

→ 冬季せん定だけでは、樹形がつくりづらい。

夏場の新梢管理とセットで、枝の先端に力がいくようにしていく。

②葉芽が少ない。 長果枝（30cm以上） 先端+基部～中間部の数芽が葉芽

中果枝（10～30cm）先端のみ葉芽の場合が多い

→ むやみに結果枝の先刈りを行うと、葉芽を切り、花が咲くだけとなる場合あり。

特に長果枝の先刈り時は、葉芽を必ず確認する。

③枝の発生量は少なめで、しかも強めに発生しやすい。

→ 発生した枝に結実させていくしかないので、枝を多めに置く。

思い通りの樹形や枝配置にならなくても、割り切って、栽培していく。

(2) 「新潟大実」「昭和」・・・弱勢にしないことがポイント

①枝が発生しやすく、弱樹勢となりやすい。

→ 樹形をつくっていく段階は、骨格となる枝を強めに先刈りする。

②中短果枝が発生しやすい。

→ 結果枝は、3～4年使ったら基部又は生育のよい枝まで切り戻し、新しい強い結果枝を出すことを徹底する。

③全体に弱勢となれば、更新用の枝が発生しづらくなる。

→ 全体に、強めの樹勢を維持するようなせん定とする。

もし弱い結果枝ばかりになったら、こまめにハサミを入れ、短果枝を整理する。

(3) 「信州大実」

①枝の発生は少なく、しかも太いが、比較的素直に発生する。

→ 結果枝の先刈り時は、必ず葉芽を確認し、先端を強く維持する。

②樹勢が強く、胴枯病にやや弱い。

→ 若木時代（5～6年生）までは、夏場の新梢管理とセットで、徒長を防ぐ。

(4) 「ハーコット」

①樹勢が強く、胴枯病にきわめて弱い。

→ 若木時代（5～6年生）までは、夏場の新梢管理とセットで、徒長を防ぐ。

太枝の除去は、9月の秋季せん定とする。

冬季せん定は、厳寒期を過ぎた2月中下旬～3月上中旬（芽がふくらむ前）の間に行く。

②樹皮が薄く、日焼けなどの障害が発生しやすい。

→ 密植にし、枝量を意識的に多くして、日焼けを防ぐ。